

論文要旨

所属ゼミ	高木 晴夫 研究室	学籍番号	80128969	氏名	山口 忠克
(論文題名)					
企業別労使関係のあるべき姿の一考察 労使が真に経営の両輪になる為には					
(内容の要旨)					
<p>労働組合の組織率は、2002年6月末現在、20.2%であり、間もなく20%を切ろうとしている。成果主義導入による賃金の個別化や業界横並び賃金の限界が指摘され、一部からは春闘不要論、組合不要論が囁かれている。しかし、一方で、日本的ガバナンスの担い手、従業員代表制の担い手、不祥事を未然に防ぐ経営チェック機構の担い手として、労働組合の求められる役割は高まっていると考えられる。</p> <p>この論文では、労働組合が再び存在意義を高め、求められる責任を果たしていく為の処方箋を導き出すことを目的としている。研究方法としては、航空業界における労使関係を事例に取り上げ、実体験から生まれる労使関係への問題認識を、従来の労使関係論の枠を超えて、組織論、社会学、進化生態学といった異分野の理論を援用しながら考察し、解決策を模索するというアプローチを採用した。</p> <p>研究においては、理想的な労使の関係を「信頼と緊張の協働関係」＝「労使パートナー型」と掲げ、その実現に向けて、労使が取り組むべき課題の考察を行った。経営側は、労働組合という存在を経営システムに不可欠な機能であると認知し、経営の方針としてOBM(オープンブック・マネジメント)のような全員参加型経営を志向していくことが必要であり、労働組合側は、従来型の運動手法に囚われることなく、主体的に行動していく姿勢を持ち、経営に対する対案提示能力を高めていく必要がある。そして、また、労使は、それらを支えていく人材の育成に向けて、合同で人材育成の機会を拡大していくことが重要であるという結論に至った。</p>					